



6. 環境研究

環境先進大学、地域の環境研究拠点としての環境研究の推進

平成24年度には368件の研究課題が文部科学省科学研究費助成事業として採択されています。また、リサーチセンターには18研究主題が登録されており、人文社会系、理工系、医学系の環境研究が産学官民との連携により積極的に推進されています。先進的環境研究の拠点（プラットフォーム）となっている環境研究について紹介します。

人文学部

● 日本山村の「地域存続力」に関する研究—新たな山村像の構築をめざして—

人文学部 文化学科地誌学系／安食和宏（教授）

日本の山村地域・過疎地域では、人口減少と高齢化が進んでおり、今後消滅に向かうと予想される集落も増えてきました。しかし、そうした中でも、地域独自の資源を活用し、その環境を守りながら存続を図っている例に注目し、山村地域の経済と環境との関わり方について調べています。

山村地域の中で、高齢化が著しく進んで、いずれ消滅に向かうだろうと思われる集落は「**限界集落**」と称され、この用語はマスコミでもよく使われるようになりました。しかし実際には、山村地域が軒並み活力を失っているわけではなく、地域の活性化に向けたさまざまな工夫と取り組みも広く展開されています。

こうした地域の存続を支える力は、どのように生み出されるのでしょうか。私たちは、「山村ならではの」という地域独自の資源、その地域の環境をいかに持続的に活用していけるかが、重要なポイントだろうと考えました。そして、各地域での具体的なフィールドワークに基づき、環境・資源の活用方策、経済活動、そして住民組織のあり方について調査を重ね、今後の方向性を探っています。

私たちは、平成22年度から、各地の山村でみられるいろいろな対応を広域的に把握するために、全国各地の特徴的な山村地域を巡ってきました。ここでは、地元・三重県の例を紹介しましょう。

三重県の紀和町（現在は熊野市の一部）は、**高齢化率**でみると、全国の最高レベルに達している（平成22年国勢調査データで56.8%）山村です。この町でみられる特色ある取り組みとして、「丸山千枚田」の保存と棚田のオーナー制度が挙げられます。平成5年に町内の丸山地区で「千枚田保存会」が結成されてから、それまで放棄されていた棚田の復元作業が進められました。その結果、全国一の規模ともいわれる棚田が整備されました（田の総数は1,340枚）。

その後、都市住民を呼び込むオーナー制度が平成8年から始まり、現在に至っています。毎年100組を超える申し込みがあり、オーナー契約件数は安定しています。しかし、丸山地区の高齢化は確実に進み（平成22年で70%超）、

棚田維持のための労働力不足の問題が生じてきました。そこで今では、広域的に保存会の会員を募集して、対応しています。

この「丸山千枚田」の保全管理とオーナー制度の運営を担ってきたのが、財団法人「紀和町ふるさと公社」（現在は「熊野市ふるさと振興公社」）です。この公社は、その他にも、地元で飼育されている「熊野地鶏」、新しく発見された柑橘「新姫（にいひめ）」の加工品、地元産品を生かした「さんま醤油」などの生産と販売にも意欲的に取り組んでいます。こうした取り組みは、この地域ならではの独自の資源・環境にこだわったもので、それが「地域存続力」にどのように（どの程度）結びついていくのか、その仕組みをさらに調べていきたいと思っています。

注）この研究は、科研費（22520805）の助成を受けて、他大学の教員2名と共に行っている共同研究です。



「丸山千枚田」の全景